

## 学校評価アンケート結果

平成28年度2学期に、本校教員による学校自己評価アンケートを実施しました。またその結果をもとに、3学期に本校の学校関係者にご協力をいただき、関係者評価を実施しました。結果を簡単にまとめて報告します。

本文、表中に記載されている数値は質問項目に対する回答の平均値であり、本校教員の考えの概ねの傾向を示しています。質問項目ごとに「あてはまる度合い」について1〜5ポイントで評定をつけ、項目間で比較できるようにしています。

今回のアンケートでは、特に加えた「ICT機器の活用」に関する項目を除き、経年変化を見るため、8年前、4年前と同じ項目を使用しています。

表1. 4年前と比べ、得点が大きく上昇した項目

校舎等の施設・設備一般については、満足できる状況にある	+0.38
特別支援教育への取り組みについては、満足できる状況にある	+0.32
到達度の低い生徒に対する配慮は十分である	+0.24
カリキュラム(教育課程)の在り方は、適切な状況にある	+0.21

表2. 得点が大きく下降した項目

部活動の在り方は、適切な状況にある	-0.36
-------------------	-------

表3. IT 機器の活用についての項目

授業において、IT 機器の活用を行っている	2.48
授業において、IT 機器を活用することは有効であるとする	3.47
授業において、IT 機器を積極的に導入していくつもりである	2.98
本校において、IT 機器の設備は十分である	2.93
本校において、IT 機器の活用は十分である	2.68
本校において、IT 機器をより積極的に導入していくべきである	3.19

### 1. 自己、関係者評価(4年前との比較と新項目)

○得点が大きく上昇した項目(表1)

平均得点が大きく上昇した項目を示します。「校舎等の施設・設備一般については、満足できる状況にある」「特別支援教育への取り組みについては、満足できる状況にある」「到達度の低い生徒に対する配慮は十分である」「カリキュラム(教育課程)の在り方は、適切な状況にある」で上昇しています。

校舎は改築後、使用に慣れて実感されてきた結果でしょうか。満足度が上がっています。

「特別支援教育はこれからの一番の課題になると思われます」という意見が見られるように、この課題については教職員の高い関心が向けられています。特別支援教育推進委員の拡充、カウンセリング制度の導入、周知、個別対応の経験の蓄積など、ここ数年、状況が改善されています。

「到達度の低い生徒と高い生徒の差が大きく、そのどちらに重心を置いて授業するか苦慮する場面が増えてきた」という意見が見られるように、学力差と教育内容の選択は難しい問題です。これまで得点が低かった「到達度の低い生徒に対する配慮」ですが、到達度の低い生徒に配慮を厚くしつつあるという方向性が示される結果となっています。

「カリキュラムの在り方」については、「受験科目にはない授業は難しい。行事の日程が授業の連続性に影響して、授業が展開するので、ストレスがある」「授業が各回生でマンネリ化せぬよう、毎年の教材リニューアルは必須。教材作成に充てる時間を与えられている環境に感謝している」などの意見があります。学校の根幹をなすカリキュラムについて、難しい問題でありながら、評価が上がっているのは喜ばしいことです。

ただし、「得意な科目はするが、苦手、気が乗らない科目はしない、という生徒が増えている。『主要科目でない』と自身で判断して全く勉強しない生徒や、提出物などで成績が

つく科目でまったく提出しないなどの生徒も増えている」という関係者評価での意見を参考にして改善したいものです。

○得点が大きく下降した項目(表2)

「クラブ活動がどうあるべきか、もう一度考え直してみる時期では」「部活動の数を限定すべきだと考えます」など、部活動の在り方については、見直すべきとの結果が出ました。自主性を重んじ、様々なことをできるだけ尊重した結果、現状があるのかもしれませんが、自主・自由を損なわず、活動を適正化する工夫が必要なのかもしれません。

○新項目―教育のICT化に関する項目(表3)

「大きめのモニターやプロジェクターを設置してほしい。少なくともEBC接続が容易にできるように。ICTの活用は授業効率に役立つので、環境向上を期待」「単なる技術の進歩で根本が揺らぐものではない。必要な所で利用すればよろしい。」など、推進すべきか否かについて、賛否は分かれます。

関係者からは、「生徒の中でそういった方向への変化に対し、希望はあるのか?という態度か?」という疑問が呈されています。時代の流れに沿うことが正しいかどうか、慎重に考えるべきとの結果が出ています。

そのような中で「授業において、ICT機器を活用することは有効であるとする」「ICT機器をより積極的に導入していくべきである」という質問項目への評定は期待値である3を超えており、ICT化への抵抗よりも、推進のほうはやや優勢であることがわかりました。

### 2. おわりに

今回の自己評価、関係者評価は、4年前、8年前と同じ項目を使用して実施しています。これにより比較検討が可能となり、改善が見える状況が明らかになり、逆に浮き彫りになった課題もあります。学校関係者の精査もあり、実のある評価活動となりました。今後も自己評価、関係者評価を通して、本校の教育活動を常に見直して参ります。